

女子ミッション・スクール生徒の居住地および 家族の学歴と職業からみる階層文化の形成過程

佐々木啓子 (電気通信大学)

1. はじめに

近代日本における女子教育の形成過程において明治初期より横浜、東京、長崎など外国人居留地から発展した女子ミッション・スクールは宗教的教化や西洋的教養教育のみならず日本の女性に自由・平等・民主主義という近代の価値観や「近代家族」のモデル、そして今日の進学名門校としての女子ミッション・スクールに代表されるように、女性に業績主義的な価値観を移入した。明治30年代～大正期には女子中等教育・高等教育機関の拡大にともない各教派連合の東京女子大学が設立され、女子ミッション・スクールでは教育を充実させ進学を促進する方針をとった。そして日本が本格的に産業資本主義に参入した昭和初期、海外貿易や外国為替業務が拡大し欧米の知識や文化が求められていた時代に海外生活経験者を中心とする都市の新中間層なども支持母体となる。そして終戦以降は都市富裕層を中心に私立学校が選択され女子ミッション・スクールへの進学者も拡大したと考えられる。

本発表では東洋英和女学院の『家庭調査』(昭和19年～26年調査241名：S16年入学者51名、S18年89名、S19年46名、S20年55名)の生徒の現住所、家族(兄弟姉妹)の在学、保護者職業、家庭の宗教、趣味・習癖、課外読み物・雑誌などから、昭和20年前後に女子ミッション・スクールに在籍した生徒の家庭環境と文化的背景を明らかにすると同時に日本における中上流階層の階層文化の形成過程について考察するものである。

2. 首都東京の中上流階層の階層文化の形成過程

階層文化と教育に関する歴史社会学研究は数多いが、先進資本主義社会における上層階級に位置づく集団、なかでも首都東京における営利階級(M.ウェーバー)に相当する支配階層の形成が教育や文化とどのような関わりがあったのか、そしてそれが世代間で継承されていったのか、実は明らかにされたわけではない。そこで本発表では首都、東京における名門ミッション・スクールの家庭を分析対象として、その生徒の居住地や家族の職業、学歴、本人の趣味や読書傾向などを手掛かりにその支持母体である集団が所属していた首都東京の中上流階層の階層文化の形成と教育の関わりを検討してみよう。

3. 東京市の旧西南地区から西部郊外へ

発表者はこれまでに首都圏のミッション・スクール青山女学院高等女学部(978名)と専門部生徒(732名)の学籍簿(昭和5-16年)から現住所、保護者

職業、出身女学校・小学校、趣味などを分析した(2003、2004、2005年教育社会学大会発表)。それによれば、生徒は東京市内の南西部の旧市内および西部郊外から通学し、東部北部地区のいわゆる下町に居住する生徒が極めて少ないということが明らかになった。

本発表ではさらに終戦期から戦後初期にかけて東洋英和の生徒241名の現住所を分析したが、一層、麻布を中心とするお屋敷街や、郊外区でも高級住宅地からの通学者が大部分を占め、旧市街東北部の下町からは皆無と行ってよい。むしろ距離的には遠い多摩地区や横浜、湘南地区からの通学者が多いという結果となった。終戦の混乱期にもかかわらず上流階級が住む地域では一般家庭とは異なる生活空間が広がっていたかのようである。

(表1) 東洋英和女学院生徒住所(S19-26年調査)

都心西部	千代田区 中央区 港区 新宿区	4 4 78 5	都心東部	文京区 台東区 墨田区 江東区	3 0 0 1	多摩地区(武蔵野市、国立市等)	9
郊外西部	品川区 目黒区 大田区 世田谷区 渋谷区 中野区 杉並区	11 19 17 20 17 5 13	郊外東部	豊島区 北区 荒川区 板橋区 練馬区 足立区 葛飾区 江戸川区	2 1 0 2 3 0 0 0	神奈川県(横浜、藤沢、鎌倉等)	20
						千葉県(稲毛、津田沼等)	3
						埼玉県	1
						その他	2

入学年度：昭和16年(51名)、18年(89名)、19年(46名)、20年(55名)

4. 兄弟姉妹の在学

(表2) 東洋英和女学院・兄弟姉妹の在学(中等教育のみ)

(S19-26年調査)		本人(東洋英和)入学年度別			
兄弟姉妹在学		S16年	S18年	S19年	S20年
公立中等教育機関(旧制中学校・高女、および新制高校・中学校)		3	17	12	6
東京高師・都立大学付属中学校			1	1	
(公立 小計)		3	18	13	6
慶應普通部・中学部		3	2	2	9
麻布中学校		1	2	3	1
暁星中学校		1	3	1	1
青山学院中学部			1	1	2
学習院高等科・中等部		1		2	
その他私立(東京中学校、成城、成蹊、武蔵、開成、早稲田、芝、浅野、海城等)		2	4	5	8
東洋英和女学院		12	16	12	8
その他私立(香蘭、女子学習院、鎌倉、桜蔭、山脇、東京女学院、戸板等)		3	4	0	4
(私立 小計)		23	32	26	33
合計		26	50	39	39

そうしたいわば階層による棲み分けは東洋英和女学院の生徒の兄弟姉妹が在籍する学校(表2)でも見られる。昭和16年-20年入学者の年度ごとの調査において圧倒的に私立が多く、なかでも慶應普通

部、麻布中学、暁星中学を初めとする名門私立中学校に在籍していることがわかる。そして今日の進学校となっている中高一貫の私立学校への通学者が次第に増えてくる。

初等教育機関では中等教育機関に比べれば公立が多いものの、麻布、誠之、鷹番、鞆絵、高輪台、白銀、泰明、青南の各小学校（国民学校）、といった公立名門小学校や神奈川県（の辻堂小学校、そして戦後は郊外への移転とみられる奥沢、国分寺、小平小学校など西部多摩地区への拡散が見られる。姉妹についてはほぼ同じ東洋英和に在籍している。

一方で、生徒現住所に僅かにみられた都心東部や郊外区東部の下町の小学校は皆無といってよい。そうした地域に住所をもつ生徒の家庭では地元の公立小学校を避ける傾向にあったと思われる。

5. 保護者の職業

東洋英和女学院の生徒たちは良家の子が多く、明治期には政府高官や華族、財閥系の実業家たちがキリスト教に関わりを求め子女をミッション・スクールに入学させた。一方でキリスト教徒の中流階級出身者も在籍し授業料の支給を受けた生徒がいたことが記録に残っている（『東洋英和女学院百年史』）。

（表3）東洋英和 保護者職業 調査年（S19-26年）

I-1	法人経営者（取締役社長・専務理事など）	38
I-2	上級事務管理職（部長以上）	12
	上級技術者（建築・船長）	2
I-3	下級事務管理職（課長・係長）	3
	事務職員（会社員、職位掲載なしを含む）	72
II	官吏	12
	軍人	1
	教員	3
III	大学教授（学院長含む）	9
	自由業（音楽家・著述業）	7
	医師	6
	弁護士	5
	その他（薬剤師・特許弁理士など）	3
IV-1	商業実業家（海産物商など）	12
	工業実業家（鉄工所経営など）	10
IV-2	商店主（飲食業など）	4
	小工業主（帽子製造業など）	4
V	地主	1
	学生（兄）	1
	無職	30
合計（人数）		235

S16-20年入学者 調査時：高女4・5年次、新制高校3年次

（表3）のI-1法人経営者を上流階級とするならば、I-2, 3は新中間層と位置づけられるものの、I-1に分化する可能性がある。一方で、IVは生産手段を所有し、I、II、IIIのクラスターとは明確に区分されるであろう。Vは主に無職層（資産生活者）だが、この層はIと企業内の分業と見ることもできるが、IV-1を分化させた母体と見ることもできる。法人経営者と商業・工業実業家を経営者として纏めるならば、生徒の25.5%はこうした経営者層出身である。さらに無職層・地主を加えて富裕層あるいは上流階級とすれば、生徒の39.1%がそうした上流階級出身者ということになる。

6. 生徒の家庭の文化資本

女子ミッション・スクール生徒の家庭の文化的状況を『家庭調査』の調査項目である、読み物調査（「課外読み物、雑誌ソノ他、書名」と趣味（「趣味・習

癖」）から描き出そう。家庭調査実施年によって戦前期（昭和19年・51名）と戦後期（昭和22-26年・190名）に分けてみると、戦前期では「少女ノ友」9人、「新女苑」3名、「その他少女小説など」3名、「歴史物語」4名、「岩波文庫」3名、「夏目漱石全集」3名、「翻訳物」3名、「文学全集」3名、と少女向け読み物が中心であるが、戦後になると以下の（表4）のように「世界文学全集」「外国文学」等、体系的に文学書に親しんでいたことがわかる。学校での読書指導もあったと思われるが、家庭で備えている文学書や全集が反映されていると思われる。また雑誌類ではリーダーズダイジェスト、ライフ、Timeなど海外の翻訳雑誌などが多数みられ、少女雑誌が少なくなっている。一方で戦災からの早い復興を感じさせるような音楽、美術、映画、演劇の月刊誌、さらには受験雑誌「蛍雪時代」、そして「英語青年」「英語研究」などの専門誌が読まれていたことがわかる。（詳細は発表時配布資料）

（表4）東洋英和女学院 読み物調査（S22-26年調査）

文学・文芸書	雑誌	
世界文学全集	リーダーズダイジェスト	46
日本文学全集	文芸春秋	21
文学全集	ライフ・Time・ニューエイジ等	14
外国文学	英語青年・英語研究	5
翻訳物	科学雑誌	2
文芸書	蛍雪時代	7
小説		10
岩波文庫	音楽の友など	9
聖書など	美術手帖など	3
詩集	映画雑誌	5
歴史書	歌劇・演劇・華道・短歌誌	5
日本古典		2
夏目漱石全集	婦人之友・婦人画報など	19
源氏物語	スタイルブック	3
樋口一葉全集他	ひまわり・そっくり・少女雑誌	10
旅行記・偉人伝など	その他	2
152		151

「趣味」に関しては戦前期の高等女学校の生徒の趣味では「読書」が群を抜いて多い―読書以外の趣味は極めて少ない―が、女子ミッション・スクールにおいては、「音楽」「スポーツ」が一般の高女に比べて極めて多い（詳細は発表時）。

7. まとめ

大企業経営者や自由業など名家出身の子女が在籍した東洋英和女学院は大都市富裕層が住む地域性に依存し、私学によって共有される学校での経験とその世代間にわたるネットワークの存在は、その階層的封鎖性による特有の生活形式が存在し再生産されたとみられる。学校という場を通して共有される文化は階級を形成する契機になると考えられるだろう。

参考資料

- ・森岡清美『日本の近代社会とキリスト教』評論社、1970年
- ・P. ブルデュー/立花英裕訳『国家貴族I, II』藤原書店、2012年
- ・佐々木啓子「女子ミッション・スクールの階層文化と教育―青山女学院（1925-45）を中心として」（第55回日本教育社会学会大会、要旨収録、2003年）
- ・『家庭調査』東洋英和女学院資料室所蔵
- ＊本報告の『家庭調査』の閲覧に際して個人情報に触れる箇所の閲覧には東洋英和資料室による多大な手続き上の作業をしていただいたことにこの場を借りて謝意を表したい。また、本報告には科学研究費補助研究「近代日本における都市上層・新中間層の階層文化と教育の実証的研究」（課題番号185306605001）の成果の一部が含まれる。
- （他の参考文献は紙幅の関係上、発表時の配布資料に掲載）